

## ◆第1回キャリア教育講演会

全学年・職員・保護者対象

1. 日時 平成21年6月17日(水) 14:30～16:10
2. 講師 齋藤 孝氏(明治大学文学部教授)
3. 演題 「知情意体を合わせ持つ ～読書力とコミュニケーション力～」
4. 講師紹介

東京大学法学部卒業。東京大学大学院教育学研究科学校教育学専攻博士課程等を経て現職。専門は教育学、身体論、コミュニケーション論。2001年、『身体感覚を取り戻す』で新潮学芸賞を受賞、教育スタイル論の提唱者として知られ、『声に出して読みたい日本語』(2001年、草思社)が150万部を超えるベストセラーとなり、同著で毎日出版文化賞特別賞受賞。その後、専門の教育学、日本語教育などの書籍からビジネス書、コミュニケーションを基礎とした関連書籍を多数執筆。日本テレビ『世界一受けたい授業』に講師として出演、NHK教育テレビ『にほんごであそぼ』、フジテレビ『ガチャガチャポン!』の企画監修をつとめた。



## 5. 講演要旨

「人として生きるために大事なことを伝えたい」——講演はこの言葉から始まりました。今回は運動と勉強と人間性(＝知情意体)を繋ぐものとしての「技」についてお話下しました。

理解が曖昧な箇所をノートに書き出し、友人と二人で読み比べた受験時代。三色ボールペンでラインを引きながらの「自分を本にくぐらせる」読書。書物の2割を読むことで内容の8割を推察して掴む読書法。せっかく本を読んでも内容を覚えていないと全く意味がない。内容を他者に語るようにすると頭の中に定着する、といった具体的な話が次々と紹介されました。これらを通して、掴み取った内容(インプット)を他者に伝えること(アウトプット)の重要性を「技」と称して強調されました。また、テニス指導の体験談を引き合いに出しつつ、物事の関係性(＝文脈)を的確に把握することの重要性や、今の自分の状況を客観的に評価することの大切さも教えていただきました。

——「自由」とは何か。それは気持ちや個性の発現などではなく、先のような「使える技」を多く身につけることである。「技」を身につけるには「万回」単位の訓練が必要とされ、「千回」単位では到達出来ない。我々はその「技」を身につける以前に何故諦めてしまうのか。我々にはもっと粘りが必要である。それを重ねることが、将来における様々な選択の「自由度」を押し広げることに繋がる。

——読書にしろ講演にしろ、その内容の本質を如何に自分の心や頭に刻みつけるかが問われている。そのために「一対一」および「一期一会」の態度で対象に臨むことが肝心。これはコミュニケーションも同様で、相手と良好な関係を紡ぐために、まず相手の好きなことを調べ、知る必要がある。そして情を込めてそれを語るべきだ。

齋藤先生は示唆に富んだ様々な言葉を、投げ掛けてくれました。実際に「偏愛マップ」を作成して隣の人と語ってみたり、最後には『マクベス』と『弁天娘女男白波』を齋藤先生と一緒に音読しました。本校の体育祭のビデオをご覧になっていた齋藤先生は、「さすが『人文字軍団』！」と時折誉めて(?)下さり、皆の笑いを誘っていました。楽しくてしかも深く考えさせられた講演でした。

6. 関連URL 齋藤孝氏のホームページ <http://www.kisc.meiji.ac.jp/~saito/>

#### ◆第2回キャリア教育講演会

全学年・職員・保護者対象

1. 日時 平成21年12月4日(金) 14:30～16:10
2. 講師 藤井 妙法 さん(天台宗僧侶)
3. 演題 「君たちの夢を叶えるために ～今なすべきこと～」
4. 講師紹介

1949年 大阪市生まれ。子どもの頃、四天王寺で参拝者から施しを受けている人々を見て人生に疑問を抱き、それ以後、さまざまな思想遍歴を重ねる。滋賀県の比叡山や奈良県の三輪山での修業を経て、69年20歳の時に仏教に帰依する。76年27歳の時、天台宗総本山比叡山延暦寺大講堂において正式に出家得度し、天台宗の僧侶となる。

京都教育大学で心理学を、大谷大学で宗教学を、京都大学で哲学を学ぶ。講演・企業研修では、経営者と社員の意識改革を行い、社風を一新させ、多くの企業の立て直しに成功、赤字企業を黒字企業に転換させる。また、阪神淡路大震災ではボランティア活動を行い、講演と研修で得た1000万円を日本青年会議所に寄付。



#### 5. 講演要旨

「人生の始まりにいる若い人たちが一人ひとりの人生を充実したものにするために、今、何をなすべきか。」

藤井先生は、ご自分の生い立ちを、ユーモラスな口調で語り始められました。「私の生き方に最も大きな影響を与えたのは両親です。両親は義務教育さえ満足に受けていなかったけれども、『我々は生かされている』という、大切な教えを私に授けてくれました。」

先生がお生まれになったのは太平洋戦争直後の大阪。3、4歳の頃、傷痕(しょうい)軍人が大寺院の前で唄を歌ったり楽器を演奏している様子を見て衝撃を受け、将来、偉い人になり、そのような人を救いたいという一念で、幼心に僧侶になることを決意。小学校時代から偉人伝を乱読し、3・4年生で岩波書店や講談社の哲学・心理学・宗教学などの書籍に関心を示し、また成績が振るわなかったために、いじめの対象となった辛い体験にも触れられました。中学2年で登校拒否のため留年したときの、周囲の視線の冷ややかさ。「異種」であることをしみじみと実感されました。

その後始めた柔道により、身体を鍛えられた先生は、高校の先生に、人間として強くなるためには学問をしなくてはならないと勧められ、高校2年生で大学進学を目指すことになります。基礎に戻って小学校3年生の内容から復習し、一年予備校に通った後、見事大学に合格。大学卒業後は比叡山で、手指の関節が砕け、頸椎を痛めるほどの厳しい修行を積まれたそうです。

辛い経験をしたからこそ人の痛みが自分の痛みとしてわかるのだと先生はおっしゃいます。「絶望しそうになることもあったけれども、これまでやってこられた。それは自分に『存在価値』を感じているからです。」

「存在価値」=「生きる目的」・「生きる目標」=〈私はXするために生きています〉

「人間というものは、生きる目的が明確であればあるほど、途中の苦しみに耐えることができる。」アウシュビッツ強制収容所における人々の死と生を見つめた『夜と霧』の著者として有名なユダヤ系心理学者ヴィクトル・フランクルの話为例にあげられました。

そして、先生ご自身の「存在価値」について、ご両親の生き方から受け継いだものとして、以下のように語られました。

——私の両親は、二人とも尋常小学校を中退し、10歳で丁稚奉公、女中奉公にでた。父は戦争から帰ってきて私をもうけたが、学もないので職を選ばず、ボルトやナットを自転車の荷台に載せ配達する仕事に就いた。父が58歳のとき、腰にできた腫瘍を摘出する手術で脊椎の中枢神経が傷つき、全身麻痺状態になった。しかし、父は家族の生活のため再び働き始めた。ノルマを終えるために帰宅は10時～11時と遅くなった。私は、少しでも父の役に立ちたいと、毎晩父の帰宅に合わせて風呂を沸かし、背中を流すことを自らに課した。父は身体にたくさん傷をつくり、服も傷んで破れていたが、一言も愚痴を言わなかった。

中学2年で留年の件で学校に呼ばれ、校長室でさんざん怒られたが、家に帰った両親は私を責めなかった。両親は私を信じてくれた。自分はそれで救われたのだと思う。

55歳で定年だった当時、父は67、8歳でも仕事を続けていた。高校時代、見かねて大学進学を辞め、働こうとしたときもあった。しかし、父は大学に行けと言ってきかなかった。

ある日、父が寝床から起き上がれなくなった。私が雇用主の社長のところに事情を説明しに行ったところ、社長から「働けない者は即刻クビだ」と申し渡された。私がそれを父に告げられないうちに、2週間後、父は衰弱死した。

遺体は軽かった。父は命を削って自分と母のために働いてくれたのだと感じた。葬式にやってきた社長は、「他の会社では使わないような者を使っていたのだ。退職金はびた一文も出さずつもりはない」と言って出て行った。悔しきでぶるぶる身体が震えた。また、住んでいた家の大家も、父が亡くなったとみるや立ち退きを要求してきた。

少ない持ち物を整理していたとき、父の遺品が出てきた。細々(こまごま)とした文房具と小学校の時に貰った賞状だった。父は、学年で一番の成績をとった者に与えられる「学年優等賞」の賞状と副賞の算盤(そろばん)一丁を大事にしまっていたのだ。私はそこでやっとわかった。「父は本当は自分が勉強したかったのだ。貧しさのために学問を途中で断念せざるを得なかった父は、自分の子どもには、そういう思いをさせたくない、子どもは絶対に大学にやると決めたのだ」と。

そこで自分は90年計画を立てた。〈40歳までに、いろいろな大学で学問をやり、修行に励もう。40歳から80歳にかけては、学校の講演会や企業の研修会の講師をしてお金を貯めよう。そして、80歳以降に、足長募金の受け皿として、修学困難な子どもたちのための財団をつくるのだ。もし余力があれば、アジアで小学校

を作り、その国の発展のために初等教育を充実させたい。〉

さらに先生はこうおっしゃいました。

「私の父は可哀想でも、みじめでもありません。父は人生の勝利者であり、成功者である。結婚しない、子どもを生まないという選択肢もあるが、もしあなたたちに子どもができれば、子どもの誇りになる親になってほしい。そして孫に、自分の祖父や祖母は偉かったと言われるようになってほしいと思います。

そして、父に対して私が一つだけ誇れることがあるとすれば、それは父よりも長生きをしたことです。生きていれば、きっと良いことがある。皆さんの人生が幸せなものであるよう、心から祈ります。」

会場では、多くの生徒、保護者が涙を流していました。

講演に対して生徒副会長の堀内さんが「私たち玉名高校生も、自分たちの『存在価値』を見つけ、自分たちの人生を充実させ、親の世代から受け継いだ価値あるものを次の世代に繋いでいきたいと思います」と謝辞を述べました。

最後に、講演を終えられた先生から、玉名高校生に向けて、西郷南州(隆盛)の詩をふまえた色紙をいただきました。「耐雪潔梅花 経霜紅楓葉(雪に耐え梅花潔し 霜を経て楓葉紅(あかし)」試練を経て人は高潔になり、実りを手にするという事をご自身の半生を通して私たちに示してくださいました。

#### ◆第3回キャリア教育講演会

全学年・職員・保護者対象

1. 日時 平成22年3月19日(金) 13:40～15:10
2. 講師 永田 雅一 さん(海洋動物学者・海洋ジャーナリスト)
3. 演題 「“うみ”から見た地球の未来」
4. 講師紹介

1977年東京水産大学(現・東京海洋大学)卒業後、制作会社での海洋資源及び環境の調査・撮影や記録映画などの企画演出を経て1986年独立。事務所「キャプテン・マック海洋研究所」を設立。海洋調査・研究に参加。海洋ドキュメンタリー番組の企画及びリポート、科学雑誌、海洋専門誌などの取材・執筆を行う。これまでに70カ国の海に8000回以上も潜り、現在も調査・研究を続ける。

#### 5. 著書

『サンゴ礁の小さな小さな世界』『キャプテンマックの世海紀行』『玉取物語』『海に潜る～地球環境のいま～』『南極半島ペンギン村』他多数。



## 6. 講演要旨

「地球上で一体何が起きているのか、うみから見た地球の姿を皆さんにお伝えします。」永田先生の講演が始まりました。北極海から南極海に渡っての「うみ」の現状を、スライドとクイズを交えながら紹介して頂きました。

2007年にカナダの砕氷船に乗って北極海を目指したものの、予想に反して氷を割る必要がなかった。割れた氷が繋がりにくくなり、上空から見るとくねくねと蛇行する川のようになっていた。これは太平洋から北極海に流れ込む海流の水温上昇に端を発しており、海面が露呈すればするほど、海水が太陽熱を吸収し、氷溶解のスピードを早める。その結果、永久凍土の島であるアラスカ・シシモレフ島に大潮が押し寄せるようになり、600人余りの住民はアラスカ本土への移住を余儀なくされた。

南下して日本の現状。永田先生の地元の静岡県富士宮市。芝川に生息する生物の数が減ってきた。イモリがなかなか見つからない。東京都隅田川。徳川家康が三河湾のシラウオを放流したが、明治の半ばに絶滅。沖縄県宮古島。オニヒトデに食い尽くされて白い骨格だけが残るサンゴ礁。日本の川や海の自然は山の豊かさと連関しており、そのバランスが崩れて来ている。

更に南下し、永田先生の研究所があるパラオ共和国。ウルトラマンの頭部に似たサキシマスオウノキの種子。「タマナ」という名の木はくり貫かれて「トーキングドラム」に使われる。水位上昇により砂浜の高さが140cmも沈下したガルメアウス島。大潮の際は木の高いところまで海水が満ち、立ち枯れを起こす。引き潮の際、その根っこ部分だけがむき出しになった砂浜の異様な光景。その一方で流れ出した砂をかぶって死滅するサンゴ礁。

南極。棚氷が割れて冰山となり漂流。南極のブラジル基地では気温が4～6℃上昇。氷河の85%が後退傾向にある。南極の氷が全て溶けると61mの海面上昇を招く。

世界の二酸化炭素の排出量は年々増加している。1960年には22.3億トンであったものが、2010年には80億トン、2060年には160億トンと予想される。その結果、世界の気温は5℃上昇する。我々はどうしたらよいか。我々に出来ることはないのか。

日本の森を活性化しよう。街に木を植えよう。1年間に人間が呼吸によって排出する二酸化炭素量は、一人で320kg。それに対し一本のスギが1年間で吸収する二酸化炭素量は13.9kg。よって人間一人の二酸化炭素を吸収するために必要なスギの木は23本。永田先生自身は、家の周囲にゴーヤのアーチを作って、室温を5℃下げている。地球温暖化をこれ以上進行させないために、私たち一人ひとりに何が出来るかを真剣に考え、それを実行しよう、と最後を締めくくられました。

私たちは「地球温暖化」と聞いてもどこか遠くのことのように思いがちですが、その影響が実際に私たちの身近なところに現れてきていることが痛感された講演でした。